

# 吉田南さん(ヴァイオリン)応援レポート

## オール・モーツァルト・プログラム

2017年11月23日(木) 15:00開演  
調布グリーンホール 大ホール

### <演奏会概要>

#### ◆出演者

指揮： 飯守泰次郎  
クラリネット： コハーン・イシュトヴァーン  
ヴァイオリン： 吉田 南  
管弦楽： 東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団

#### ◆プログラム

クラリネット協奏曲 イ長調 K.622  
ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調「トルコ風」 K.219  
交響曲第40番 ト短調 K.550



フレッシュ名曲コンサート  
**Mozart** 175th Anniversary  
オール・モーツァルト・プログラム  
巨匠 飯守泰次郎 × モーツァルト  
交響曲第40番 ト短調 K.550  
クラリネット協奏曲 イ長調 K.622  
ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調「トルコ風」K.219  
2017年11月23日(木) 15:00開演  
調布市グリーンホール 大ホール  
チケット価格: 前売券 4,000円(A) 3,500円(B) 2,500円(C) 1,500円(D)  
当日券 5,000円(A) 4,500円(B) 3,500円(C) 2,500円(D)  
9月27日(水) 14:00 調布市グリーンホール 小ホール 終了しました

(当日のフライヤー)

まだ19歳の吉田南さん。それにもかかわらず、実に堂々と、モーツァルトの曲をモーツァルトらしく弾いていた。

「モーツァルトが協奏曲第5番を作曲したのはいまの私と同じ19歳の時だったので、モーツァルトと同じ気持ちになって曲を感じたい。」「イキイキとした躍動感や澄み切った高音の美しい音の響きを表現したい、と思って弾いていました。」という南さん。

確かに、明るく、美しいメロディが次から次へと続き、躍動感があり、澄んだ高音が響き渡り、モーツァルトを堪能した演奏会だった。

# Q&A

吉田南さんはまだ19歳。それでも多くの聴衆を前に、オーケストラをバックに、実に堂々とヴァイオリンを響かせていた。何が今のような吉田さんを育てたのか。

19歳の吉田さんは今、未来について何を考えているのか。興味がどんどん沸いてくる。ご本人に直接お聞きしたところ、吉田さんの思いがよく伝わる、とても丁寧な回答をいただきました。ぜひお読みください！！

◆ Q1. 5歳の時に吉田さん自らヴァイオリンを弾きたい、とおっしゃったそうですが、ヴァイオリンを弾きたいと思ったきっかけは何だったのですか。吉田さんにとってヴァイオリンの魅力は何ですか。

◆ A1. わたしの故郷は田舎で、当時なかなか近くで本格的なオーケストラの演奏を聞くことは難しかったのですが、母がクラシック音楽が好きで芸術関係の仕事をしていたこともあって、度々クラシック音楽のTVやCDを視聴していました。

たまたまTVで、オーケストラをバックに女性ソリストがキレイなドレスを着て美しい音で演奏しているのを見て、「これはいい!」と思いました。それがきっかけで、両親にしつこく、しつこく習いたいと訴えるようになりました。

ヴァイオリンの魅力はやはり響きの美しさ、単純な造りの楽器なのに限りなくいろいろな表現ができるどころと、身体に密着して演奏するのでとても親近感が湧くことです。小さい時から時々ヴァイオリンのG線の音がオジサンの声に聞こえて、乱暴に弾いたら「コラッ!」と叱られたりしてました。



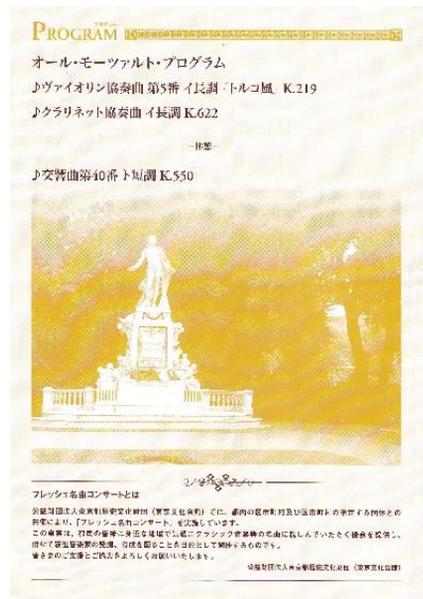
(リハーサル風景)

◆ Q2. どの時代の、どの作曲家がお好きですか。今日演奏されたモーツァルトはどんな作曲家だと思われませんか。

◆ A2. 逆に嫌いな作曲家はあまりいません。いままで受け継がれてきた曲は、やはり愛されて残ってきたものだけあって、どれも魅力的です。その時その時練習したり演奏したりする作曲家は、みんな好きになってしまいます。

モーツァルトは、ものすごいテクニックをつかうとか、ものすごい譜読みが大変だとか、そういうことは全くないですが、あまりにも素直な美しさなのでどういうふうに弾いたらいいのかわからなくなる時があります。

モーツァルト自身はユーモアのある人だったと勉強しましたが、その人柄の奥にある苦悩なども曲に反映されていると思います。



(当日のプログラム)

◆ Q3. 来年からアメリカ、ボストンに留学予定とのことですが、ヨーロッパではなくアメリカを選ばれた理由は何ですか。留学で何をしたいとお考えですか。

◆ A3. 私が音楽の道に進もうと決めた時にお世話になっていた鷲尾悠子先生、高校前からこれから先も師事していきたいと願っている原田幸一郎先生、両先生ともアメリカで勉強され、活躍された方です。尊敬する先生方が学ばれた場所でわたしも勉強したいと思っていました。

ただ両先生が勉強されたのはニューヨークの学校でしたが、今回ボストンにどうしても師事したいと思えるミリアムフリード先生という素晴らしい教授がいらっしゃるの、こちらに進学することにしました。

わたしはいままで真面目に正しくヴァイオリンを弾くことを勉強してきましたが、音楽は人を楽しませるものでなければならないということを、コンサートを沢山させていただくようになってとても強く感じています。

派手なパフォーマンスで、カタチだけかっこよく整えるのではなくて、本当にその音楽や作曲家を理解した上で、わたしのキャラクターを音で表現できるように、勉強に取り組みたいと思います。



豆知識

### ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756年1月27日-1791年12月5日)

1756年 ザルツブルクに生まれる。父のレオポルドは大司教に使える宮廷作曲家であり、副楽長だった。幼少の頃より神童ぶりを発揮。5歳で作曲し、9歳で交響曲第1番を作曲。

1775年 モーツァルト19歳の時、モーツァルト最後のヴァイオリン協奏曲と言われるヴァイオリン協奏曲第5番を作曲。

この時代は貴族社会。宮廷に仕えなければなかなか安定した収入を得られない時代。宮廷仕えに満足できなかったモーツァルトはザルツブルク大司教と衝突。自由を求めてウィーンでの定住を決意し、宮廷楽団を離れるが、生活は困窮。借金を求める手紙も残されているという。

1791年 35歳という若さでこの世を去る。管弦楽曲だけで300以上を残した。

1789年 フランス革命 王政に対する民衆の不満が爆発し、暴動が起き、国王一家が追われた市民革命が勃発したのはモーツァルトが亡くなる2年前のこと。どんな天才も、生まれた時代の中で生きるしかない。

(クラシック作曲家ファイル 編著者: 中島克麿 株式会社ドレミ楽譜出版社 および インターネットより)



(指揮者の飯守泰次郎氏と)

◆ Q4. 今日、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団との協演でしたが、協奏曲の演奏にはどのような楽しさ、喜び、難しさがありますか。

◆ A4. ピアニストと二人で弾く時は、ヴァイオリンの都合を汲み取ってもらって、ピアノに都合をつけてもらうことができますが、大きい編成のオーケストラになるほど、自分勝手な振る舞いは慎むべきだと思ってやっています。

この音を少し長く弾きたいなあとか ちょっとテンポを揺らしたいなあと思っても、それはオーケストラではなかなか通用しないので、自分の中でどう折り合いをつけながら最大限に表現していくのが難しいところです。

そういう困難をクリアしてスケールの大きな演奏ができたんじゃないかな、と思えた時が最高に楽しいです。

◆ Q5. 今日の演奏会ではどのような演奏をしたいと考えていましたか。聴衆に何を感じてほしい、何を伝えたいと思って演奏されていましたか。

◆ A5. イキイキとした躍動感や澄み切った高音の美しい音の響き、カデンツァの楽しさと、「トルコ風」というモーツァルトにしては珍しいオリエンタルな雰囲気楽しさ、そういうものが表現できてお客様にも喜んで頂けたらいいなと思って弾いていました。

◆ Q6. 今日の演奏を経て何か新しい発見がありましたか。今日の演奏で得たものを今後に生かすとしたら、どのような点でしょうか。

◆ A6. もっと一音一音オーケストラのハーモニーと共に言葉になるように、3楽章のトルコ風のところはもっと民族的な、土臭さを感じられるようにしたいです。

モーツァルトが協奏曲第5番を作曲したのは今のわたしと同じ19歳の時だったのでモーツァルトと同じ気持ちになって曲を感じたいです。新しい発見と反省が一緒になってしまいましたが、こんなことを感じました。



(演奏後のほっとした表情の吉田さん)

◆ Q7. 将来、どんな演奏家になりたいですか。そのために今は何をすべきだとお考えですか。

◆ A7. 楽しい気分の人がいたらもっとウキウキするような気持ちにできる音楽を、悲しく寂しい気持ちの人がいたら、そっと寄り添えるような音楽ができればいいなと思います。

自分が目立つようなアピール度の高い演奏が好みの人もあるかもしれませんが、私は主役は音楽であり作曲家であると思っています。

中身のないキレイな箱だけの演奏家にならないように一つ一つの曲を深く掘り下げて勉強し、ヴァイオリンだけではなく、広く音楽の世界に目を向け、更には芸術全体にも触れていきたいです。

「主役は音楽であり作曲家であると思っています。」と語る吉田さん。主役は音楽であり作曲家ではあるが、演奏者が奏でる音楽には演奏者の個性、人柄が現れるはず。「楽しい気分の人がいたらもっとウキウキするような気持ちにする音楽、悲しく寂しい気持ちの人がいたら、そっと寄り添えるような演奏をしたい。」という吉田さん。聴衆はきっとそういう吉田さんの演奏に惹かれ、音色に触れたいと思い、演奏会に足を運ぶのだと思う。

「中身のないキレイな箱だけの演奏家にならないように一つ一つの曲を深く掘り下げて勉強し、ヴァイオリンだけではなく、広く音楽の世界に目を向け、更には芸術全体にも触れていきたい。」と語る吉田さん。視野を広げ、様々な経験を積み、大きくなっていく吉田さんの音楽の変化を追いかけていきたい。